

(科学研究費補助金「諏訪湖・天竜川水系の物質循環、水循環とマネーフローからの研究」中間報告)

諏訪湖・天竜川プロジェクト発展に望むこと

1997 年から住民団体と行ってきた「諏訪湖・天竜川健康診断」が昨年は第 8 回目を迎えました。このイベントは天竜川の水源地から天竜川の河口、遠州灘まで、まさに天竜川の流域を対象とした水質調査です。素人の水質調査とは言っても並の調査ではないのが、24 時間、2 時間間隔、計 13 回の水質調査、というところにあります。分析手法はパックテストですが、天竜川本川と支川を含めて、約 50 地点での一斉調査の結果は、科学調査では得られない貴重な情報と効果を内蔵しています。それも 8 年間継続して、蓄積されたデータは世界にも例がないのではないかと、参加者をおだてながら、後 2 回、計 10 回を目指して今年も頑張りましたと、昨年末の報告会でも約束してきました。

このイベントのきっかけは、諏訪湖浄化を目指しての諏訪湖流入河川の住民による水質調査ですが、最初から流域を目指していたわけではありません。諏訪湖に限ってみれば、諏訪湖集水域ですが、天竜川のような広い流域を一斉に調査が出来るとは思っていませんでした。それが 8 年間継続し、そして 10 年間続けられるという基礎には、流域の住民の参加があつてこそと言えます。私は、流域研究が本当にできるにはこのような住民と専門家の連携が必要だ、ということはこの「諏訪湖・天竜川健康診断」で知ることができたように思います。

この水質調査の目的は、住民が科学的な調査をするということではありません。住民の目的は自分たちの生活の身近にある川がどのような状態にあるかを知ることと、常に身近な水に関心を持つ、というソフト的な水環境保全の行為でしかありません。しかし、その行為のついでに科学的な研究試料を採取し、専門家に提供することはできます。何年も続けて水質を自分で観測していると、それがパックテストではあっても、ちょっとした注意で科学的な試料を採取することができるようになります。

そのような素地を持っている人々のネットワークが天竜川流域にはあるということは、他の流域にはない、貴重な財産であると思います。試みに 3 年ほど前、このネットワークの人たちの協力で研究試料の採取と、信州大学での試料分析が行われました。河床の付着物については戸田研究室で、水の試料については鈴木研究室で主に分析が行われ、その結果の説明は「諏訪湖・天竜川健康診断」の中間報告会で、戸田、鈴木両先生から、解説した経過があります。得られた結果を住民に分かりやすく説明し、理解してもらうことも重要な流域研究の仕事の一部です。

私が信州大学に赴任した 1970 年頃、名古屋大学の島津康夫教授は「環境研究は地域に住み込みで行わなければ本物にはならない」と著書に書かれていました。私も実感としてそう思いますし、それから約 30 年を諏訪湖と天竜川の流域に過ごし、そこを研究の場として過ごしてきた経験からしても、住み込むと同時に流域の住民との協同がもう一つ大切だと言う気がしています。別に住民をおだてるという意味ではなく、流域という広い対象の場で、流域を理解するためには、研究試料を広い地域から、同時に得ることが必要です。そのためには、研究を理解し、協

働してくれる住民の手が必要であり、研究者だけでは限界があります。そして、理解してくれる住民と手をつなぐためには、研究者側にもそれなりの理解と努力が必要になります。

「諏訪湖・天龍川プロジェクト」をこれからさらに発展させていくためには、これらの点にも目を向けて行って欲しいと思っています。それが出来て初めて、このプロジェクトが真の意味での日本初の流域研究になるものと期待しています。これからも積極的に住民との交流を重ね、息の長い、足が地に着いた研究に育てていってくださることを期待しています。

2005年2月20日

早稲田大学人間科学部 特任教授

信州大学名誉教授 沖野外輝夫